

古墳時代の瀬戸内航路と兵庫県内の祭祀遺跡

大平 茂

1 はじめに

古墳時代、瀬戸内海上交通で一番重要なのが朝鮮半島諸国（新羅・百済・伽倻）との交易である。その中でも、大きいのは石器に替わり武器・工具となる鉄製品を作るための原材料（鉄鋌）の搬入であった。

さて、平成12年に兵庫県教育委員会の魚住分館で、豊岡市の袴狭遺跡から出土した木製品の整理作業中に船団を描く線刻絵画を発見している。

この絵画は、絵空事を書いたものなのか。それとも、円山川の河口もしくは日本海を走る一大船団を実際に見て描いたのだろうか。

木製品の出土層位から見て、弥生時代から古墳時代初期に行っていた朝鮮半島との交易船団（準構造船）を描いたものと考えるのが妥当であろう。日本海側の但馬域（城崎・小見塚古墳近辺）では、こうした風景（海に行く船団や、円山川を往来する船団）を実際に見ることができたのである。

日本海側のルートは、その後京都府の丹後地域に白米山1号古墳・蛭子山1号古墳や、網野銚子山古墳・神明山古墳の約200m級の前方後円墳が築造されたのを見ると、丹後国の被葬者が掌握していたであろう。

そして、4世紀後半に倭王権が環大阪湾配置の一つとして播磨の最東部に築造したのが神戸市垂水区に所在する五色塚古墳であった。これは、立地からも見ても明らかに海を意識した古墳で、福岡県宗像・沖ノ島遺跡に海上交通の祭祀が始まった時期とほぼ一致するのである。

本稿は、兵庫県瀬戸内海の古墳時代の港（水門）・津を検討するためのもので、津の位置・場所を比定する資料に王権の祭祀具である石製模造品の類を使用した。すなわち、海上交通の要所（拠点）で行なわれたであろう通行安全の祭祀から、水門・津を探求しようとするものである。

石製模造品とは、滑石製の有孔円板（鏡の模造品）、剣形品（武器の模造品）、勾玉・管玉の模造品と白玉（ガラス玉の模造品）等で、その初期の分布を全国的に見ると倭王権が勢力を拡大するのに併せて、各国に普及させた王権の祭祀具であると理解できた。これらの品々は、最初古墳の副葬品として墳墓の祭祀に使用され、埋葬された人物が神に昇華するための必要な道具と捉えることができる。

次いで、純粋な自然神を祀る神祭りの遺跡にも使用が始まった。この典型例が、九州福岡県の沖ノ島祭祀遺跡である。沖ノ島は玄界灘の真ん中にある孤島で、最初の祭祀遺物は島の中腹にある巨大な岩の上に鏡・玉類・武器類・石製腕飾類など、古墳の副葬品と共通するものを大量に出土した。

この4世紀後半の時期に、倭王権も海を渡り朝鮮半島との交流を始めたのである。この時、沖ノ島に海の守護神を祀り、朝鮮半島への航海の安全を祈ったのが祭祀の始まりと考えられよう。

古代における瀬戸内海の航路は大別すれば二ルートあり、一つは摂津・播磨・吉備を南岸沿いに進むものと、もう一つ紀伊・淡路を経由して四国讃岐・伊予を北岸沿いに西進するものである。古代史の岸俊男氏は、瀬戸内海南岸コース（四国北岸側）を紀氏とその同族の存在から考察している⁽¹⁾。

一方、考古学の側は古墳時代前・中期の古墳に海を望むものがあり、この立地から間壁忠彦氏（倉敷考古館）等は海上交通の確保と関連付ける。また、梶山林継氏（國學院大学）は山陽道方面における祭

祀遺跡を沿岸・島嶼に多いことから、内海航路の関係遺跡と捉え、朝鮮半島交流とも関連すると示唆したのである⁽²⁾。

2 播磨地域・石製模造品の分布と長越遺跡

では、4世紀の後半、倭王権の所在する大和を出発した船は最初兵庫県摂津側のどこに寄航したのか。これを考える前に、まず兵庫県の石製模造品を代表する長越遺跡がある播磨地域から見てみよう。

最古の石製模造品が出土しているのは、姫路市飯田長越遺跡の有孔円板と同じく姫路市香寺町東前畑遺跡の剣形品である（第1図）。

長越遺跡はJR姫路駅の南西約2kmに位置し、市川分流船場川の右岸沖積地に立地する。昭和48年の姫路バイパス工事に先立つ発掘調査で、明らかになった弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡である。

祭祀遺物には、大溝出土の勾玉・有孔円板・剣形品・白玉・管玉・素文鏡・銅鏃・鳥形及び魚形木製品などがあつた。共伴した土器は、長越Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式とされる弥生時代末～古墳時代前期の古式土師器である。

筆者は、特に勾玉と有孔円板をその形態から長越Ⅲ式の4世紀後半と捉え、銅鏃と溝底から出土した木製品等は長越Ⅰ式の3世紀後半～4世紀初頭に想定している。

また、長越遺跡は海岸線から離れているが準構造船の船材発見と大溝（水路・クリーク）の存在からも、水門・津の遺跡で良いと捉えた。それ故、この遺跡は大和（奈良県大神神社の磐座祭祀）から九州宗像・沖ノ島（磐座祭祀）まで続く、瀬戸内海上交通の拠点祭祀の一つと考えられたのである。

さらに、姫路手柄には全国最古級の子持勾玉（第1図）を出土した小山遺跡V地点も存在する⁽³⁾。

東前畑遺跡は姫路の奥・福崎盆地の南端に位置し、市川が造り出した右岸の下位段丘上に立地する。平成15年からの土地区画整理事業に伴う発掘調査（旧香寺町教委）で明らかになった弥生時代～奈良時代にかけての集落遺跡である。

祭祀遺物は、剣形品・有孔円板・勾玉・管玉・棗玉・これらの未製品と鉄製品などがある。祭祀遺構のみの出土でなく、竪穴住居跡から石製模造品の未製品や剥片・滑石の原石が発見されるなど、播磨地域最古の滑石製玉造遺跡だったことも判明している。

年代は、古墳に副葬されていても不思議でない県下で最古と言える剣形品の存在から、長越遺跡と同じ4世紀後半に捉えた⁽⁴⁾。

次に、拡がったのが北西部宍粟市一宮町の伊和遺跡である。姫路市街地から国道29号を北上すること約40km、揖保川左岸標高170mの河岸段丘上に立地する。昭和45年の県営ほ場整備工事中に発見された遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡などを確認している。祭祀遺物は住居跡から勾玉・白玉・鉄剣と、近辺で発見された有孔円板に胴部穿孔の小型丸底壺などがある（第2図）。年代は、5世紀の前半と捉える。石製模造品に、鉄製品を伴うことが注目できよう。

さらに、注意すべきはこの地が播磨一宮伊和神社の鎮座地（伊和氏の本拠地）ということである。ここから見えてくるのは、弥生時代姫路平野に進出していた伊和氏が倭王権側へ行った「播磨版の国譲り」である。大国主命と同じく伊和大神は、播磨の奥地（本貫地）に幽閉されたのであろう。さらに、この地域では4世紀末から5世紀初頭に伊和中山1号墳（全長62m）が築造された。伊和氏の奥津城である。変形な前方後円墳であるが、これを許可されたことで倭王権の祭祀を受け入れたのであろう。

倭王権は播磨中央部の長越遺跡と前東畑遺跡を中心に、伊和氏の本拠地を押さえると姫路の西にある太子町亀田遺跡、市川東岸の国分寺台地遺跡周辺にも次々と拡がり、6世紀代にはたつの市の竹万遺跡へと拡大したのである。ここ（旧飾磨郡・旧揖保郡）に、一つのまとまりを見ることができた。なお、市川左岸の御着には、5世紀の初頭に壇場山古墳（全長約142m、大阪府古市古墳群中の応神天皇皇后の墓とされる仲津山古墳1/2の相似形）が登場している。

北東播磨では、小野市に所在する高田宮ノ後遺跡に初期タイプの有孔円板が発見されている。平成元年に、ほ場整備事業で事前調査した加古川東岸の微高地に立地する弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である。隅丸方形や方形の竪穴住居跡などが、発見された。

当該遺物は、多量の前期の土器と共に溝からの出土である。長越遺跡の最古のものと同タイプで、敷地大塚古墳（径54mの円墳）に葬られた豪族集落の可能性もあろう。加古川流域中の一番古いものである。昭和45年から46年にかけて、中国縦貫自動車道の建設に伴って発掘した加西市小谷遺跡でも、前期（4世紀代）の竪穴住居の発見があることから当然入取しているものと考ええる。なお、加西地域には中期初頭（4世紀末）に玉丘古墳（全長109m、大阪府古市古墳群の津堂城山古墳1/2の相似形）が登場してくる。

この後、6世紀に入ると加東市の家原・堂ノ元遺跡や西脇市の遺跡へ拡がっていくのである。このように、旧賀茂郡の加西・小野地域にも一つのまとまりが見えた。

また、加古川の下流域には昭和50年、権現ダムの工業用水送付管の埋設工事に伴って調査された加古川市砂部遺跡がある。初期須恵器を持つことから5世紀前半には石製模造品の祭祀が入っていると考ええるが、現在発見されている石製模造品（有孔円板、勾玉、剣形品）は小谷遺跡と同様の新しいタイプのものである。筆者は、市川流域の姫路市（針間国造集団）や加古川中流域の加西・小野市（針間鴨国造集団）とは別集団の遺跡と捉えている。

一方、明石川周辺では明石市北王子遺跡が5世紀中葉頃、続いて神戸市西区白水遺跡と玉津田中遺跡に5世紀後半から末の時期にかけて有孔円板・勾玉などの石製模造品が出現する。白水遺跡は、神戸市教委が平成5年から10年にかけて、白水土地区画整理事業で調査した弥生時代・古墳時代・奈良平安時代を中心とする集落遺跡である。石製模造品は、平成6年の第3次調査第2トレンチのSX01から出土した勾玉、有孔円板、白玉などで（第3図の上）、多量の鉄製品と鉄片を伴ったのが特徴である。

玉津田中遺跡は、県教委が昭和57年から平成3年まで田中土地区画整理事業で発掘した、弥生時代・古墳時代と中世を中心とする集落遺跡である。石製模造品は、昭和62年亀ノ郷7区の溝から勾玉・白玉などが出土している（第3図の下）。

この後、6世紀前後に新方遺跡（大日地点）で玉造りが始まると、出合遺跡、吉田南遺跡、押部谷遺跡など旧明石郡の遺跡へ集中的に配布し、最後が三木市西ヶ原遺跡である（第4図の下）。

この地域では、4世紀後半に神戸市五色塚古墳（全長194m、垂仁天皇の後日葉酢媛を葬ったとされる奈良県佐紀陵山古墳と相似形）が築造される。この時期に伴う祭祀が、明石市藤江別所遺跡の井戸祭祀である。ここでは、井戸の中から筆者が石製模造品の一種と捉え直した車輪石と小型の銅鏡等が発見され（第4図の上）、湧水（水神）の祭りが行われたのであろう。古墳以外に石釧や車輪石等の石製腕飾類が見つかることは極めて稀で、明石地域の豪族（五色塚古墳の被葬者）だけでなく、倭王権も関与したものと考えられよう。

これに間違いなければ、この時期の祭祀は宗像・沖ノ島の祭祀と同じ朝鮮半島の鉄資源を手に入れるために、瀬戸内海航路での通行安全祭祀と飲料水等補給地の津（港）の祀りが中心だったと捉えられる。

なお、明石地域は他の二つ（旧飾磨郡・旧賀茂郡）の集中地点と異なり、純粋な石製模造品の開始時期の遅れることが注意された。この点、後述するように南あわじ市の木戸原遺跡と雨流遺跡の出現時期を考えると、瀬戸内海航路のコース変更がこれに関係したと閃いた。気に掛かるのは、明石市北王子遺跡の石製模造品を見直したところ古いタイプの有孔円板に鉄鋌が混じっていたことである。

3 淡路地域・木戸原遺跡と雨流遺跡の祭祀

次は、南あわじ市の木戸原遺跡と雨流遺跡、二つの遺跡の出現と淡路島の祭祀遺跡を見ていこう。ここ淡路の祭祀遺跡にも、倭王権が関係していたのである（4世紀後半に五色塚古墳が築造される際、伝承だけでなく実際に葺石として淡路島からの石が持ち込まれていたのも、当然といえば当然であるが）。

三原平野の入口に近い旧西淡町の雨流遺跡は、昭和60・61年と63年に淡路縦貫自動車建設に伴って明らかになった、志知川東岸（旧三原川）の三角州に立地する古墳時代中期（5世紀後半）から後期（6世紀）を中心とする集落址である。

中期の水田と、5世紀後半～6世紀初めの竪穴住居跡12棟及び掘立柱建物跡3棟などを発見した。これらの住居跡には、須恵器・有孔円板・碧玉原石・砥石・椀形鉄滓・羽口などの遺物が出土している（第5図は、110号と111号住居址の遺物出土状況）。中期後半の鍛冶炉や鍛冶滓廃棄土坑では、椀形鉄滓・羽口と、鍛造剥片なども見られる。鍛造剥片の確認は、鉄製品の生産を行なっていたということである。また、流路出土の遺物には製塩土器や子持勾玉、椀形鉄滓、須恵器模倣土師器、鋤・鍬の木製品などもあり（第6図）、さらに包含層の須恵器を見ていくと、ほぼ断絶なく開始の5世紀後半から6世紀末まで存続したことが窺える。

この遺跡の特徴は、出土した須恵器の全てが王権の管理した大阪府堺市の陶邑古窯跡産のものということ。集落内に鍛冶工房を持ち、鉄滓の分析から原料は鉄鉱石で、精錬鍛冶と鍛錬鍛冶（鉄製品作り）の二つの工程が行われていたこと。碧玉原石が蛍光X線分析の結果、島根県（出雲）花仙山産と判明したことなどが挙げられる。すなわち、5世紀代の鍛冶遺構は、畿内では倭王権が関与した大阪府交野市の森遺跡群や葛城氏の豪族居館に付随した奈良県南郷遺跡群などに見られ、朝鮮半島から入ってきた鉄素材を精錬・鍛錬する集落、そして出雲産原石の玉造は畿内では奈良県曽我遺跡にしかなく、これまた倭王権が関与した遺跡と考えられることである。

さらに、発掘調査で出土していた須恵器を模倣したとされる土師器、これが近年の研究によって（木戸原遺跡出土の黒色土器を含め）、渡来系（朝鮮半島）の土器ではないかとの指摘がある。朝鮮半島からの搬入品であれば、鍛冶に使用された鉄素材も朝鮮半島からの搬入品である可能性が高まり、分析から鉄鉱石を使用したとされる椀形鉄滓の出土がうまく説明できよう。玉造はよく分かっていないが、鍛冶と祭祀は倭王権が間違いなく関与しているのである。

次に、旧三原町所在の木戸原遺跡は平成17・18年に県営ほ場整備事業に伴って調査された、志知川の支流（馬乗捨川）東岸の扇状地に立地する弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世の集落址である。

古墳時代の遺構には、中期（5世紀前半～）の竪穴住居跡群と掘立柱建物群があり、特に一辺10mを測る大型の方形竪穴住居跡や、柵を持つ掘立柱建物跡の存在は豪族の居館跡だと考えられる。竪穴住居跡からは初期須恵器、韓式系土器、石製模造品（勾玉・管玉・白玉）などが出土し、その他の遺構には土師器や須恵器、須恵器模倣黒色土師器、鉄鋌、ガラス玉、石製模造品（有孔円板・剣形品・勾玉・管玉・白玉）などがある（写真1）。石製模造品の未製品や滑石片が含まれることから、玉造も行われて

いたようだ。

このように、木戸原遺跡も発見された遺構・出土遺物から見ると、倭王権が関与し、朝鮮半島に関わった豪族の居館遺跡と言えそうである。

調査担当者は、この遺跡が最も繁栄した年代を古墳時代の中期にあたる5世紀代、特に5世紀前半に見るべきものが多く、韓式系土器・鉄鋌・石製模造品が特徴と考えた。そして、5世紀後半から6世紀に入ると先の雨流遺跡に移ったと指摘する。筆者も、石製模造品の有孔円板は正円形で中央部に穿孔したものが多く、勾玉は断面が円形を呈するなど、5世紀前半に倭王権が関与した祭祀が始まったと捉えた。

このように、木戸原遺跡から雨流遺跡へ繋がるとなれば、二つの遺跡は後に「淡路の屯倉」になる一連の遺跡と考えて良いと推測する。

さらに、その前段階の遺跡として旧南淡町に井手田遺跡が存在する。この遺跡は、平成18年以降に南あわじ市教委と県の教育委員会が、それぞれ別の事業で発掘調査を行い、併せて古墳時代前期（4世紀代）の竪穴住居跡4棟、中期（5世紀代）の竪穴住居跡11棟などが発見されている。注目される遺物に、12号住居出土の管玉や白玉の祭祀遺物、7号住居出土の樽形甕の須恵器がある。この須恵器は、初期須恵器と呼ばれる大阪・陶邑産で祭祀に使用したものである。

また、市教委の調査では河道から前期（4世紀後半）の土器と共に管玉・白玉・ガラス玉が出土している。石製模造品を使用する祭祀では、播磨・長越遺跡と同じ初期の古い時期のものである。

ここで、少し淡路島の古墳時代祭祀の流れ（天的宗儀以降）を説明すると、最初の祭祀遺構・遺物は、旧西淡町鉦田遺跡の北地区SD1から出土した仿製内行花文鏡で3世紀末から4世紀前半頃の時期になる。手捏土器や高杯などの土器も伴ったと考えられるが、明らかでない。次が、前記した井手田遺跡の河道から出土した祭祀遺物の時期4世紀後半。この後、5世紀前半の祭祀遺物が木戸原遺跡の鉄鋌・韓式系土器に伴う石製模造品、井手田遺跡出土の甕になる。5世紀後半のものが、雨流遺跡で出土した子持勾玉や石製模造品と古式の須恵器類である。特に、木戸原遺跡の豪族居館祭祀と雨流遺跡の祭祀は内容的にも倭王権（葛城氏）が関与しているとしか考えられない。

そして、この頃（5世紀代）旧一宮町の伊佐奈岐神社遺跡は神社の建物がまだ存在しないが、石製模造品の資料を見るかぎり祭祀は始まっていたのであろう（第7図の上）。また、洲本市波毛遺跡の河道から出土した有孔円板と手捏土器も、中期のものと考えられる。

しかし、淡路島には姫路市壇場山古墳や加西市玉丘古墳、加古川市行者塚古墳のような中期の大型古墳が見当たらない。そればかりでなく、古墳時代を通じて前方後円墳が一基も存在しない。前方後円墳を築造できるほどの有力な豪族が育っておらず、淡路で異質な韓式系土器・鉄鋌・石製模造品を多く持つ遺跡となれば、木戸原と雨流の二つの遺跡は淡路地域に自然発生した集落とは考えられないのである。

では、何故こうした集落が出現したのであろうか。

筆者が木戸原遺跡を注目したのは、祭祀遺物の中に鉄鋌と韓式土器を持っていたこと。早くから石製模造品と共に鉄鋌を出土した遺跡には、愛媛県の出作遺跡（5世紀後半）と大分県荻鶴遺跡（5世紀前半）などがある。これらの遺跡では、鍛冶遺構と祭祀が結びつくのである。それ故、木戸原遺跡（祭祀）と雨流遺跡（鍛冶）を同一目的のために造られた集落と考えれば、5世紀代の早い段階の鉄鋌は間違いなく朝鮮半島（伽倻・百済・新羅）から持ち込んだもので、瀬戸内航路が関係してくるのである。

これを理解するためには、東隣、紀伊北部の遺跡（古墳時代前期末から中期初頭に突如出現する集落）

が参考になろう。和歌山市鳴滝遺跡、楠見遺跡、西庄遺跡等である。西庄遺跡は製塩・漁労の一大生産拠点として、鳴滝遺跡は大型倉庫群として評価でき、楠見遺跡は紀ノ川に隣接した港・津の性格が想定できる。また、いずれも渡来系の要素が強く、海上物流の拠点遺跡として位置づけられるのである。

古墳時代前期において、主要な朝鮮半島との交流は神戸市五色塚古墳の立地・出現を見るまでもなく、瀬戸内海北岸（摂津・播磨側）の津・泊りを利用して、明石海峡を通る航路であった。後に、摂播五泊と呼ばれる港である。この航路が、王権の中で朝鮮半島経営に力を持つ葛城氏が強くなると、5世紀初頭の紀伊北部の遺跡のように大和から紀伊へ出て、紀伊北部から阿万への瀬戸内海南岸航路（淡路島南廻りルート、阿万港から湊港へは河川交通）に変更する必要があったのであろう。

そのため、淡路島には中継の基地として旧南淡町阿万から旧西淡町湊への河川ルートの中に、物流拠点の集落が造られる。それが、5世紀の初めに突然生まれた木戸原遺跡と考えたのである。この居館は地元住民の集落ではなく、大和・葛城氏によって意図的に造られた直轄の集落だったのであろう。

こう捉えると、先ほどの播磨の祭祀遺跡、なぜ明石国造域が針間国造域と針間鴨国造域より石製模造品の使用が遅れるのか、長いあいだ分からなかったが、明石側海岸部に5世紀代の古い時期の祭祀遺跡が見られなかったことも合理的に解釈出来るのである。

神戸市五色塚古墳が築造された4世紀後半には、朝鮮半島との交流は主に瀬戸内海北岸の航路だったので、明石市の藤江別所遺跡の井泉祭祀（車輪石・小型仿製鏡を使用する祭祀）や播磨・長越遺跡などの津・泊りなどで、飲料水の供給と瀬戸内航路安全祭祀が実修された。しかし、5世紀初頭に瀬戸内海南岸コース（淡路島南廻り）に変更されたため、瀬戸内航路も四国側を通る航路になり明石海峡を通過しないので、就航の安全祭祀も行う必要が無くなったと捉えた。

もう一つ、木戸原遺跡と同様の性格を持つと考えた雨流遺跡は、中期後半から後期の遺跡である。ここで気になったのが、旧三原町志知に所在する佐礼尾古墳。埋葬主体は全長2.2m幅0.7mの箱式石棺風の小型堅穴石室とされ、副葬品には淡路島唯一の六鈴鏡（第7図の下）と、鉄刀・鉄斧・鉄矛・鉄鏃などの鉄製品がある。筆者は、鈴鏡の出土と鉄製品の種類の多さに注目し、5世紀後半から6世紀初めの築造で立地場所からも雨流遺跡に関係がある古墳と捉えた。

この鈴鏡は西日本に極めて少ない鏡であるが、兵庫県では篠山市宝地山2号墳に出土例がある。篠山市内はこの他にも鈴の付いた遺物が多く、宗我部郷が存在することから大和・蘇我氏に関係がある地域とされている。そして、畿内では奈良県の新沢千塚古墳群（115号墳）に、出土例が認められた。この古墳群が最も盛んに造られたのは5世紀の半ばから6世紀前半の時期で、文献史学の和田萃氏は被葬者を朝鮮半島経営に参画した氏族と考え、大伴氏と蘇我氏を候補に挙げている。

蘇我氏が関係するならば筆者にとって都合の良い話になるが、もっと注意すべきは朝鮮半島に関った豪族・武人がこの鏡を入手（持つこと）が出来たのではないかと言うことである。鈴鏡自体が古墳時代の鏡としては後出であり全国で150例ほど存在するが、東日本がその7割を占めるため遅れた地域の鏡という評価で定着している。これは、是非とも見直す必要がある。

さらに、佐礼尾古墳の築造時期は木戸原遺跡が雨流遺跡に移動した時期とも重なってくる。5世紀前半、木戸原遺跡の開始期は葛城氏が関与していたのであるが、本宗家の大和・葛城氏が没落後、淡路に送り込まれたのは朝鮮半島に関わった佐礼尾古墳の被葬者であり、この鏡が蘇我氏と繋がれば、雨流遺跡は木戸原遺跡を含め5世紀の後半に葛城氏から引き継いだ蘇我氏関係者の遺跡とも捉えられよう。その後は、淡路最古の横穴式石室を持つ旧西淡町志知のハバ古墳、この被葬者が『淡路の屯倉』の管理者

となっていたのであろう。

4 摂津地域の石製模造品出土遺跡

5世紀前半に、東隣の兵庫県側摂津国では石製模造品を使用した祭祀遺跡が見当たらない。このことが、本当なのかを確認してみよう。

神戸市長田・須磨地域には、松野遺跡がある。ここは豪族居館を持つ集落遺跡で、木戸原遺跡と同じように滑石の玉造も行っている。石製模造品の時期は、共伴する須恵器の年代5世紀末から6世紀初頭と考えられる。明石海峡を通るルートが復活し、木戸原遺跡が衰退した頃、須磨に新しく倭王権によって造られた豪族居館の集落であろう。周辺の神楽遺跡・大田町遺跡も、5世紀後半から6世紀初頭である。祭祀の対象（神の降臨地）は、近隣の大田町遺跡などと共に高取山（神奈備）と考えている。

中央区には、5世紀末から6世紀代の生田遺跡があり、竪穴住居内や掘立柱建物（倉庫群）の柱穴から有孔円板・白玉や滑石製紡錘車が出土している。

さらに、東灘区の郡家遺跡でも子持勾玉や有孔円板・白玉などが出土し、これまた5世紀後半から6世紀初頭の年代である。また、この遺跡では第77次調査出土の鉄製品と鉄片が、愛媛県出作遺跡や南あわじ市の木戸原遺跡と同様に注目できよう。ここで、注意すべきなのが森北町遺跡の第5次調査（瀬戸内考古学研究所）出土の石製模造品の類である（第8図）。勾玉14点・有孔円板3点・白玉約1,300点が出土している。これらに、陶質土器（4世紀後半から5世紀初頭）が伴っていた。当該地は、五色塚古墳が造られた時期の瀬戸内航路の拠点祭祀遺跡になるのであろう。

芦屋市には三条九の坪遺跡に扁平な形の勾玉と月若遺跡の子持勾玉などの出土例があり、尼崎市でも若王寺遺跡の鍛冶具（羽口・鉄滓など）と石製模造品（第9図、有孔円板・勾玉・白玉・紡錘車など）が発見された。いずれも、若王寺遺跡を除いて5世紀後半から6世紀代の年代である。

ただし、尼崎市田能高田遺跡では石釧片や破鏡・有孔円板・鉄製品が出土し（第10図）、若王寺遺跡の須恵器搬入以前の遺構と共に森北町遺跡の第5次調査と近い時期の瀬戸内航海に関係するものと捉えられる。

こうした瀬戸内海北岸コース（摂津・播磨側）の時代に、兵庫県内では尼崎市田能高田遺跡から神戸市森北町遺跡、そして明石市藤江別所遺跡、さらに姫路市長越遺跡を使用するルートであったと推測出来たのである。

また、明石・須磨・長田・東灘・芦屋・西宮・尼崎側に5世紀前半の淡路島南廻り航路の時期の純粋な石製模造品の発見がなかったこと。淡路島の北部地域（明石海峡側）にも確認できず、八木奨三郎氏報告の伊佐奈岐神社禁足地出土品と淡路市東浦町の今出川遺跡出土の有孔円板だけであった。予想の通り、5世紀代は明石海峡を通過する航路でなかったことになろう。少なくとも5世紀前葉～中葉の時期では、瀬戸内海南岸コース（淡路島南廻りの航路）に変わっていたのである。

まとめ

以上、播磨国・摂津国（兵庫県側）と淡路国の石製模造品を出土した遺跡から、瀬戸内海の港・津を検討してみた。

その結果、4世紀後半に東から尼崎田能高田・神戸森北町・明石藤江別所・姫路長越近辺に瀬戸内海北岸（摂津・播磨側）を往来するコースがあり、5世紀前半になると紀伊北部から阿万への淡路島南廻りのルート（阿万港から湊港へは河川交通）に変更されたことが判明した。この瀬戸内海南岸コース（淡

路島の南廻り)には、淡路の海人が関与していたことは言うまでもない。

また、瀬戸内海の北岸コース(摂津・播磨側)では、尾崎・田能高田から神戸・森北町遺跡間のように約15kmの間隔で津・泊りを設置したと考えられる。そこで、神戸市須磨付近と加古川の下流域(高砂)にも津が必要となる。さらに、このまま西進すれば姫路長越以西ではたつの市室津か赤穂市の坂越付近にも一つ欲しい。しかし、現在まで赤穂市やたつの市に初期の石製模造品を出土する遺跡が確認されないということは、長越から家島・小豆島を経由して四国北岸に渡るルートも考える必要があろう。

すなわち、倭王権は5世紀前半から後半にいたるまでの間、瀬戸内海航路において吉備国との関係からか、その山陽側南岸を通行することが不可能な状況にあったとも考えられるのである。

【註】

- (1) 岸 俊男 1963 「紀氏に関する一試考」『近畿古文化論攷』樫原考古学研究所編 407～450頁
- (2) 梶山林継 1965 「古代祭祀遺跡の分布私考」『上代文化』第35輯 53～68頁
同 上 1970 「瀬戸内における古代祭祀」『神道宗教』第61号 1～18頁
- (3) 発見者の今里幾次氏から、手柄山は巨岩も多く磐座祭祀の遺跡だったと御教示を受けている。
- (4) なお、発見時にはなぜ福崎盆地の入口に最古級の剣形品が出土するのか理解できなかったが、この地は針間国造になった佐伯直氏の本貫地であると、文献史学の坂江渉・高橋明裕氏のグループに御教示を受けた。

【挿図出典】

- 第1図 松下 勝・渡辺 昇他 1975 『播磨・長越遺跡』文化財調査報告書 第12冊 兵庫県教育委員会
今里幾次 1992 「小山遺跡」『兵庫県史』考古資料編 大平茂実測 兵庫県
堀本裕二 2009 『東前畑遺跡・高座遺跡』姫路市教育委員会
- 第2図 村上紘揚 1974 『播磨一宮伊和遺跡』一宮町文化協会
- 第3図 安田 滋 2000 『白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡』神戸市教育委員会
菱田淳子 1994 『玉津田中遺跡』第2分冊 文化財調査報告書 第135-2冊 兵庫県教育委員会
- 第4図 稲原昭嘉 1996 『藤江別所遺跡』明石市文化財調査報告第2冊 明石市教育委員会
大平 茂 1990 「祭祀遺物よりみた古墳時代の播磨地方」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念会
- 第5図 長谷川真・藤田 淳他 1990 『雨流遺跡』文化財調査報告書 第79冊 兵庫県教育委員会
- 第6図 同 上
- 写真1 定松佳重・的崎 薫 2009 「木戸原遺跡」『埋蔵文化財調査年報Ⅱ』南あわじ市教育委員会
- 第7図 八木槌三郎 1900 「雑録」『東京人類学会雑誌』第15巻第170号 東京人類学会
- 第8図 亀田修一他 1992 「森北町遺跡」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県
大平 茂 1993 「森北町遺跡」『古墳時代の祭祀』第Ⅲ分冊 東日本埋蔵文化財研究会
- 第9図 渡辺 昇 2006 『若王寺遺跡』文化財調査報告第305冊 兵庫県教育委員会
- 第10図 甲斐昭光 1997 『田能高田遺跡』文化財調査報告第166冊 兵庫県教育委員会

【参考文献】

- 石野博信編 1996 『古代の海の道』－古代瀬戸内海の国際交流－ 学生社
関 裕二 2007 『古代史謎解き紀行Ⅳ』瀬戸内編 ポプラ社
大平 茂 2020 『ひょうごの遺跡が語る まつりの古代史』神戸新聞総合出版センター

追記

頁数、超過につき挿図は割愛としました。申し訳ありません。

なお、令和2年度兵庫県生活文化大学の「古墳時代の瀬戸内交通」『ふるさとの歴史講座』(2021.1.18)において、レジュメに同様の図版を掲載しています。必要な方があればそちらを御参照ください。